

河井道子における国際性と その信仰（その1）

一色義子

1. はじめに

河井道子（1877－1953）は、恵泉女学園のその創設の日から、正課に、聖書、国際、園芸の三科目を、一般の教科に加えて、必修とした。開校以来、日々、礼拝をもって学業を始め、戦時中には動員先きの工場でも礼拝で始めるという、キリスト教を強くかけ、国際、平和を語り、生徒の自治を励まし、海外在住の子女には寮を設けて、日夜、育成した。また、創設6年目には、米国、カナダ等の日系二世のため、留学生部を設け、異なる文化の間で育つ海外からの青年の教育を行った。

一方、恵泉女学園は、西欧の教会や宣教団体によるミッションスクールではない。このことは当初からの河井道子の意識であった。祈りと、国内、海外を含めた多くの方々の友情に支えられて、1929年、9名の生徒で借家で始めた。

現在、河井道子の国際性を考察する一つの視座は、その創設になる恵泉女学園の教育においてであることは、言をまたない。しかし、河井道子の生涯を窺見すると、それは、最後の24年間であり、そこに至る生涯全体の視点を、まず、明らかにする必要があると思われる。

そこで、河井道子の国際性を、考察するためには、その生涯を三期に分けて見ることができよう。第一期、国際性開眼期（1877－1904）。第二期、国際性実行期（1904－1926）。第三期、国際性の教育実現期（1926－1953）。である。

もとより、恵泉女学園創設後であっても、やむにやまれない要請をうけて、日本キリスト教聯盟の代表5名中唯一の女性として、1937年には日中戦争の直前に中国のキリスト教協議会の招きで訪中、平和のために話し合い、1941年、日米開戦の直前やはり唯一の女性代表として、祈りと話し合いに日本から米国へ派遣された。

1938年のインド、マドラスでの International Missionary Conference に日本代表、その他、数多くの海外キリスト教界の招きを受け、信仰と、闊達な英語による Flaming Spirit と言われた名講演で数千人の聴衆に感動を与えた。

また、1946年、北米合衆国からの教育使節団を日本が迎えた時の、日本側委員に任じられ活躍した。

このように河井道子の活動を見る時、世界とのかかわりなしには、したがって、「国際」という概念なしには考えられない。河井道子はその生涯の最後の意識の混濁した中で「これは国際的なガーゼだから、特に大事に扱うように」と言った。国際とは彼女を知るうえの Key Word といえる。河井道子の「国際」という語の用法を手掛かりとして、彼女の国際概念の領域を探る。この用語の英語を河井道子はその英文の著書“ My Lantern”において、恵泉女学園開学時の時間表に“ International study”を用い、それは学園で「国際」の教科と呼ばれた。

なお河井道子の著書には英文の自叙伝風な“ My Lantern” (1939)〔没後邦訳〕，“ Sliding Doors” (1951)，又それ以前にミッションのスタディ・ブックとして，“ Japanese Women Speak ” (一部久布白落実) などがあり、海外に読者が多かった。

日本語の著書はないが、「河井道子文集一『明治の女子』『女子青年界』よら」(1985年11月恵泉女子学園資料室委員会 代表秋田稔)〔『明治の女子』(1905ねん記事より1912年)，『女子青年界』(1912年6月より1926年3月，主に巻頭文および以後折々1941年対談記事までを収録)〕と、恵泉女学園発行の『恵泉』誌(1932年11月第1巻第1号から

1952年9月、10月合併号の巻頭文及び同年11月、1953年1月、2月の3ヶ月合併号の創立記念日祝辞（録音を起こした巻頭文）までに主に河井道子の文章がのこされている。

「河井道子文集」は、YWCA時代であり、「恵泉」誌は恵泉女学園創設・園長時代である。

また、上記の二つの記録は、1905年－1952年までの47年間（明治38年－昭和27年）である。この期は、日本の明治期の終りから、大正、昭和の戦前、戦後であって、二回の世界大戦と、日露戦争、いわゆるシベリヤ出兵、朝鮮半島、中国、台湾等及び東南アジアの諸地域等、アジアへの日本の侵略の年月に一致する。一方、米国においては、日本からの移民と排日の歴史が重なる。そして、日米、太平洋戦争と戦後である。

なお、河井道子の数えきれない講演、講話、説教はほとんど原稿なしで、メモ程度で語られた。その靈感にあふれ、機知とユーモアに富んだ、説得力ゆたかな、心を高め、信仰に前進させるような名講演がほとんど記録されていないことは、河井道子の人物と思想の展開を知るうえでは、まことに残念なことである。河井道子は文章を書く時は、手紙の場合のように感じたままに書くこともあるが、大概は用語に注意をはらい、英語でも、日本語でも部厚い辞書を離さず、忙しい合間にかなりの速度で書く文章ではあるが、それなりに気を使った。文語体で作文する世代で始まり、口語体を駆使するようになったが、文章への構えが幾分残っていた。時として、それが表面にあらわれ、感情を硝煙とし、時として、自由豁達な思想の流路を得て、河井道子独得のスタイルとなったと、見られる。

河井道子の文章を通して示される河井道子における国際性を、河井道子が書き記した上記の二系列の記録から、さぐり、その特性の断面をとらえる試みとしたい。

今回は、わけても、日本語でまとまって、書き残されているもののなかでは、一番初期である、「河井道子文集」から、その国際性をさぐってみることにする。従って、生涯の時期からみると、第二期、国際性実行期である。そして、この第二期が、次の第三期の恵泉女学園創設とその教育に

対して、前提をなす。その意味でも、第二期をとくにここにとり上げて考察することに、意味をみるものである。

2. 「河井道子文集」における河井道子の国際性

この期は河井道子が、日本YWCAの創設に力を借し、日本人最初の総幹事をつとめた時期が中心である。

これを国際性のかかわりの中から5点にしぼって見ていく。

- (1) 世界の文化と日本の文化——視点の相対化
- (2) 平和——国際性を破壊するものとして戦争
- (3) 難民——寄留の人々
- (4) 国際性の単位としての人間観——キリストによる人間観
- (5) 最も小さいものの意味を最大に考える。

これらを緯糸とすると、河井道子に貫かれている経糸は、聖書といえる。聖書理解のメンタリテイが、判断の資とされ、さらに、実行へとうつる。その実行は、些細なことであっても、あるいは飛躍があっても、何等かの実行に移行するのを特色とした。

(1) 世界の文化と日本の文化——視点の相対化

1904年(明治37)9月、河井道子は米国留学を終えて、日露戦争(1904年2月—1905年9月休戦成立)たけなわの日本に帰国した。開校まもない津田英学塾で(また翌年東京女子高等師範学校、のちのお茶の水女子大等でも)教鞭をとりはじめ、多くの女子学生に、彼女が米国で得た、キリスト教による、伝道と社会奉仕、自覚を持った女性の国際的な視野にたった新しい生き方へ身をもって教導した。具体的には教会へ、キリスト教信仰へ、そして、2、3年後には始まったYWCAの活動へ、英語や知識を学ぶために全国から集まった若い日本の女性たちの目を広げた。

現在の最も古い資料は、明治期であって、「米国女学生生活」(1905年)、「欧米女学生の美風」(1911)「汝の若き日に於て救主を知れ」(1912)などである。そこには、欧米がどのようなようであり、日本では、ど

のようかと河井道子のキリスト教視点から文化、習慣とその裏にあるものの考え方について、述べているが、かならずしも欧米一辺倒ではない。キリスト教から見、世界から見るという二様の視点がある。「若し全世界が主イエス、キリストの見方で、人類を見たら此等〔人種差別〕は問題にはなりませんまい」（16：5）というキリストの視点と、「世界から見る時」「世界を標準として見たら」、という視点が日本を世界のなかで、多様の一とする。これは、日本の、相対化の方向をしめす。また、一方で、キリスト教は「世界的」と見る。と同時に「これを信仰する者には何時の時代も絶えず新しい。『昨日も今日も何日迄も変わらず』と同時に『日に新たなり』」（9：1）「基督教は男女の区別はなく、天の父より見てわが息子わが息女と云ひ神の愛子である。（中略）然し神の前に同じく『わが父の完きが如く完くなるべし』と導かれた教へは、実に婦人をして神に似た貴き所迄達せしめんとする誠に無限の権利を与えられたものと云わねばならぬ。」という明確な自覚が、ある。同時に直ぐに、与えることを知る者になることをすすめている。『受くるより与ふる者は幸なり』と『真の神主イエス・キリストは罪ある者の為に命さへも与へ給ふた』と、続くのである。そして、キリスト教の権威として、「我々は先づ『神の国とその義しきとをもとめよ、さらばこれ等のものは加えらるべし』我が青年会は基督教の一部分であり、我が日本女子基督教青年会は万国基督教女子青年会の一部である。然しまた一方から微々たる本会も、世界を清めんとする大なる団体に属して居る事は、真に甲斐のある事である。」（9：1）

この日常の使命が、河井道子においては、はっきりと世界に通じ、国際性を帯るのである。常にグローバルである。そして、そのうえに、神のもとにおける、相対化された、国際性の根源がある。

(2) 平和 国際性を破壊するものとして戦争

1912年9月、まさに、明治から大正に移行したその時に、河井道子は日本人の最初のYWCA総幹事に任じられた。第一に万国祈禱週間が「神の国を臨らせ給へ」であって、連日世界各国の具体的祈りのテーマが示されそ

れを祈る。この事は象徴的であった。在任 13 年余、大正が終わる直前に離任したが、その年間、日露戦争の戦後処理問題の中で、アジアへの日本の政策、侵略的人権無視的なことへの危懼、更に、第一次世界大戦そのもの、シベリヤ出兵、そして、難民問題、日米摩擦と移民問題が関心の中心であるとともに、それを何等か対処をすべきこととして、クローズアップされている。それは、また、神の国を希求することにおいて、対決しなければならない。

河井道子は明確に、平和を主張し、戦争を反対した。

『傷める葦を折ることなく煙れる麻をけすことなし』の精神を実行されし主基督」を基盤に、「神と和ぐことのない時は何処に於いても安定はないのです。」（18：12）「エスのみが人を神に和がせ、神と人との間にある、大戦争を徹廃させ、天地に平和を来たらせんために世に臨まれた」「この平和を基礎として、私共は個人、家庭、社会、国家の平和を唱道致します。人類は神に対しても、他に対しても、虚偽を捨てて真に悔改め、謙遜、忍耐、同情、奉仕を実行せねば平和は樹立出来ません」「十字架の犠牲を払ひ給ひし事を覚えて、私共も真の平和を来らすためには、公私に犠牲の入る事をよく記憶致し度いものであります。」（以上 18：12）

河井道子は『新女界に戦争は嫌いだという文章をのせている。他のキリスト教の識者が、女性を含めて、戦争も時としてやむをえないという中間的発言をしているのに比して、彼女は戦争は不可だと、徹底していることから、その絶対平和への意志の強さがうかがわれる。

河井道子にとって、平和とはバランス均衡をとった平和ではなく、キリストによる絶対の平和、換言すれば、アンバランス、わけても神が一人子を罪人のために給う、という、最もアンバランスな関係のうえにたって平和を下さった意味においてであった。「おおかみと子羊」（イザヤ書 11 章）というアンバランスであり、アンバランスの中に、配慮があり、愛による「バランス」がとられ、最高の平和がくる。それを彼女は信じ、かつ待望した。それはすなわち、イエスの十字架の愛である。

それ故、次の発想へ展開される。

「彼と是（戦争）とは天地の相違ある事柄」とみて、「戦争程非文明的な

現象がまたとありましようか」と、人的、経済的に戦争の損害を述べ、
 「之が全世界を通じての情態であるとするれば、我等女子といへども対岸の
 火事視して居るべきではありません。斯かる徒費のみならず社会家庭個人
 に及ぼす悪影響にたいしては断然戦争行為の撲滅全廃を唱導せなければな
 りません。（中略）子供に尚武の氣象を与へなければ柔弱な臆病者を造る
 といふやうな点から戦争熱に捉はれる者もある（中略）が私は特に母た
 り師たり姉たる方々に申し上げたい、その様な謬見があれば一刻も早く其
 思想から離脱されねばなりません。」

「私は、始終人人から『私共基督信徒婦人は戦争の際に如何なる心得を
 持つべきか』と尋ねられます。私は思ひます。最早勇武を以って誉れとす
 る時代は過ぎ去りました。殺伐切傷は人事界の恥辱であります。私は基督
 信徒の家庭に於いて其子女を教育するに戦乱時代の物語を以て武を奨励し
 たり、武器の玩具を与へたり、唱歌に血とか敵を切れの殺せのといふやう
 な詞を用ひたり、又は人殺の真似をさせたり、仕て見せたりする如き事は
 全廃して欲しい。（中略）併し、剣は元来臆病者の持つべきもの。真の平
 和を主張し其主義の為に倒るる者こそ本当の勇者であると私共は確信致し
 ます。剣を持つものは剣をもって倒れん、柔和なる者は幸なり其人は地を
 継ぐ事を得べければなりとはキリストの御詞で御座います。（中略）一方
 に於いては真個の平和主義を子孫に鼓吹し以て国の要とささしむる為には
 婦人こそ国家を護る者と言はなければなりません。」（11：9）〔1914〕
 と、すすめる。

ここでは、非常に卑近に具体的実行可能な範囲のところまで、具体的な
 示唆をいう。

たとえば、日本と朝鮮の問題にしても、祈りを強調し、1914年におい
 て、「朝鮮は決して亡国ではありません、是より発達すべき国でありませ
 う、一粒の芥種子が長ちて天空の鳥を基枝に宿す様になると約束されし主
 の言葉が必ず実現いたしましう此国を生かすもほろぼすも其は兵力に非
 ずして平和であります。神の霊であります。日本国民は彼の国の発達を物
 質上武力のみに訴へずして霊界に訴へ彼の国の進歩を助けなければなりま

せん。益々信者の祈，同情，努力が必要であります。もし日本の信者の教育ある婦人にして朝鮮に渡る志あるならば決して金銭を思はず献身的に正義と愛，謙遜と勉勵等を以って彼民族を愛し」としてしている。(11：6)

また，台湾との関係も，「日本人はもっと基督の精神を服庸して『大ならんとする者は凡ての者の僕となれ』との教へを實行し（中略）他を奴隷視するものは必ず己が亡ぶるものである事は歴史が教へて居る。将来は基督教婦人も彼の地に渡り，」と記し，更に，通信文中に，

「〔台湾〕到着の当夜は天長節なれば祝賀の為市中に提燈行列があつて私共は教会に赴く途中それにあひましたが一種言ふべからざる悲觀の湧き来るあつて祝賀の日に心を痛めたのであります。（中略）此騒ぎに反し教会内には真面目の男女が集つて静に心を天外に走せて所謂他界の空気を呼吸するが如く（中略）罪の淵より罪と汚を洗除して靈魂の救を求むる様は世俗の混乱と異常な対照を示したように思われました。」(15：6, 1918)

ここには，聖書を基礎とする思想によって，日本の人々の様を見る視点があきらかであり，批判がある。

(3) 難民：寄留の人々 — 外的理由から外国で生きなければならない人々への関心

現在，20世紀の後半を過ぎて，世界的な難民問題が人類の重要な課題になってきた。現今では，経済に要因した出稼ぎ問題も，世界教会協議会で「難民」の定義の中に含まれようとしている。自づからの意志ではなく，国際的に，生活基盤が揺るがされ，自国を去って，未知の地に移らねばならない。国境の領域を越える人道問題が，地球大の課題として提示されている。職業的，宗教的理由ではなしに，生活上，国際間の移動で基本的な生活基盤の確保を求めて外国で生活せざるを得ない人々 — 広義の，あるいは新しい意味での「難民」の問題がクローズアップされている。国境の領域を越えて増加し，船空機による移動も多く今や全世界を巻き込む人道問題となっている。このことは，やがて，世界が一つに混ざりあう予徴なのかもしれない。

ところが、河井道子は実に 20 世紀初め、すでに、こうしたさまざまな外的理由から、母国もしくは故郷を離れて生きることを強いられてしまっている人々、その社会問題にたいして、放置されている事への痛みを強く感じ、自ら社会の関心を起こし、対策を講じようとした。

たとえば、1915 年、日本の移民の女性の北米合衆国への入国地点である天使島の現場に入り実情を探り、また、1918 年、いわゆるシベリヤ出兵の時点で、悲惨な難民の報に接すると、救護活動のため、XWCA の総幹事であるにもかかわらず、自ら、ウラジオストークに渡って行った。日本の女性で実際の救援に出掛けた者は河井道子とその同行者がはじめてのことで、当時はなぜ行くのかと新聞記者の質問せめに会った程である。このように河井道子の国際性はその具体性と実行にある。

以下それらにふれたい。

3-1 米国移民の日本女性に関して

移民問題と渡航婦人の実態調査に、四箇月カリフォルニアの南から、バンクーバーまで、太平洋岸を YWCA から派遣され視察した。

「7 月 25 日の天洋丸には百余名の日本婦人ありとの事を耳にしたれば 26 日移民局所在地なる天使島に訪問せばやと早朝家を出づ。先にも二回訪れし事のあれば、別に六ヶ敷き事もなくて係員より許可を得て乗船す。

(中略) そこで、一泊して、具に実情を知り」翌朝には、待機している人人に「米国の事を一同に語り出ぬ。」その内容の一部の箇条には「西洋の一般風俗。女の特に注意すべき点。風呂場、便所。髪、爪、帽子、靴、ハンカチーフ。話し声、歩きかた、礼の仕方。渡米の心得、誘惑に勝つ道、同胞の意味、米国の家庭。米人の嫌ふ点、好む点。」その細目はどれも手近かでやって出来ることであつた。船が島をはなれる時、名残を惜しまれ、窓には河井道子の話しの通り、清潔に洗ったハンカチが旗のように干してあり、河井の誠意への応答のようであつた。具体的な河井道子の一面をしめしている。また、「米国の政府は支那人日本人などの居留地は寛視して居るといへばよくきこえますが実際は無関係として別に制裁を加へず懲戒

もせぬといふ有様であるがために色々の罪悪が公然と行れる次第であります」という米国の対処に世界人として、批判的である。と同時に、その一文は読者に覚醒をよびかける言葉で結ばれている。「信仰を基礎として献身的に同胞を愛し教へ、米国人の間にも交際し得て日米の親善を実現せしむる日本婦人であります。此処のみならず何処にても斯る婦人がなくては在米同胞の問題は解決が遅々たるものであります。姉妹たちよ、御自重なされて日本にて十分に教育を受け信仰を養ひ、将来神の御意ならば、在米同胞姉妹の僕となりて献身されんを願ひます。」(12: 8, 9, 1915)これが一例であるが、常に、そのことのために、仕える姉妹へと、河井道子は具体的に呼びかけをくりかえしている。

同様の例は多い。「どうか神の為己れを捨つる事に依って、自らを生かす男女が、今日お集まりの方々の中から多く出ん事を願ひます。世界中に恥晒しでなく、世界中に神の名をひろめ得る人々の立たれん事を、切望して止みません。そして其中に婦人も亦加へられん事を、切に希望する次第であります。」(17: 4, 1920)

これは、海外における、日本の政策、日本人女性といえ、売春婦とみられるほどの問題性にたいしての無政策の批判の後である。

女性の職業の問題が盛んである現在なおこのような奉仕活動にどれだけ真剣に人材をつのり、呼び掛けをしているか、と考えさせられる。河井道子の国際性は、そこまで具体的であった。

帰国後、YWCAにおいて、渡航婦人教養部を、横浜、神戸などに設けた。

この米国における日本人問題は排日にまで進展する。

「加州問題の真相、両国人の感情の真底を幾分でも知りたいと思って朝より夕、夕方より夜に至る迄訪問やら会議やら、毎夜ぐたぐたに疲れて床につく」スケジュールで、「親日排日両派の人々を尋ねて意見を聞き」、「今度の加州日本問題は実に真剣に研究し真面目に親善の道を講ぜねばならぬ重大な問題」(18: 4, 1921)として、帰国の船を一船延して調べた。

3-2 難民

1918年、シベリヤ出兵に際して、悲惨な難民の報に接すると、救援活動のため、自ら、ウラジオストークに渡って行った。日本の女性で実際の救援に出掛けた者は河井道子とその同行者がはじめてのことで、当時はなぜ行くのかと新聞記者の質問せめに会った程である。

そのウラジオストークで、日本婦人の公娼、私娼のいる場所を見て、「吾等一行を窓より戸口より多くの女が眺めて居った事と、日本兵や外国兵が其家に入出入りするを見て、身を切られる様に苦しく感じた印象を持つ」た。

(中略)「金めあてで、利己我利な」日本人の実態を見そのところに、排日思想をみとっている。「力の限り世界と共に苦しみ世界と共に働き、世界の進歩を換言すれば爾心の天に成る如く地にも行はせ給へと吾等の力限りを尽くす時が来たのである。」(15:10, 1918)

さらに、シベリヤを、ハバロフスク市まで行った、そこでも、難民や女性の実情を知る。

日本にもどり、具体的救援活動をくりひろげ、救援物資、救援資金を全国的につのり、送った。更に、翌年の1月長期滞在救援を計画して、ウラジオストークに再度渡航する。赤十字を経て千五百個以上の玩具を難民の子供へおくり、子らが嬉しいクリスマスをした、と報じている。また、「市立の露孤児院」で「保育児の世話を助ける」「つまり日露親善などの意味に於て、我々が何か露国人のために働くはよい事」と。すべき働きを探索しつつ一方で「今日の浦潮は国際問題や時局が日本婦人には不利にあたると断言しやう」という。さまざまな理想主義的提案にたいして、実際に見たところからの限界と判断をわすれていない。またこのように教育不十分な時代の日本の女性たちが、生地に産業がないことと、海外で高給の甘言に扇動されて出ていったその、出生地といわれる地域にもこうした事がくり返えれないためにも、帰国後足をのぼして、実情の調査をしている。(17:1, 1920年)

欧州大戦後ベルギーで万国学生同盟会において、救援献金、さらにハンガリーやオーストリアで大学教授や、学生の飢餓救済等の案が河決された。

そこで河井道子は「可決された以上は少しでも実際の事を知る必要がある
 と思い、ビエナ市の状態を覗いて来ようと決心」その一行は日本人で、し
 かも女性は彼女一人であった。（17：12，1920）

また、日本見学にきた浦塩市の女子学生と教師 51 名が困惑している報
 に駅に迎えに行き 2 日間世話をした、がそのことを、河井道子は「これ
 もただ救助などの意ではなく、国際的交友の立場からすべきだと感じまし
 た」（19：9，1922）としている。国際問題と国内問題が直ちに実行に結びつく。

（4）人間観——神の宮

河井道子の国際の単位は、国と国との間であることと同時に、人々
 と人々との間であり、人と人との間、それは個人と個人の間でもある。こ
 こに、河井道子において、人間観が国際においても、重要な要素となる。
 その事はすでに此れ迄の論点をみても、明らかであるが、河井道子はずね
 に、世界からはじめても、結局は一人一人の人間とその人間、個人の実行
 の可能性に帰結するパターンをなす。

そこで河井道子の人間観が問題となる。

もっとも端的にそれを言い現わしているのは、「私共は『神と偕に働く』
 観念が必要」という表現であり、さらに、私たちは神の宮という観念である。

「私共は神の国を建つ可き材料であります、何の役に立つか一向に存じ
 ません、併しながら皆其れ相当の責任が与へられ必ず役に立つ可き者とな
 って居ります。或人は御国の柱石となり、或者は土台の様な大切な材料で
 あると同時に、又或者は一本の釘、眼に見えぬ床板、漆喰の様な小さなお
 役でありませうが、どうしても無用の者は御座いますまい」（15：2，1918）

その働きはどのように小さなことに見えても、神において、意味がある、
 というのが河井道子の見方であった。

こうした、神と人々との協働の目的は、『爾国を臨らせ給へ、爾旨の天
 に成るごとく地にも成せ給へ』かく祈るべしとはエスの御教へであります
 （中略）とは申せ之等の理想実現の為世界全国にどれほど多くの者が尽力
 をなし、犠牲を払って居るか知れない」その「真情は突然と湧き出たもの

でなく、それを掘ればその水源地が神の聖旨」(18:1, 1921)にあると。

それゆえ、それは、国境のない、もっとも国際性である。どこの国のひとからも、共通の目標であり、一つの価値である。しかし、河井道子はその展開において、政治的、社会組織体的でもなく、しかも河井道子はその展開に独自の具体性があった。

(5) 最も小さいものの意味を最大に考える

「『我は道也真理也生命也』と仰せられたキリストを正直に試してみたい、(中略) 若し基督の他に個人社会学校国家、国際の改造が出来ぬものならばこの基督を一層深く知りて信じ其の教へと精神とを極達〔きはめ〕て実行せんといふのであります」(19:5, 1922) この短い文の中に河井道子の国際概念の一端が見られよう。それは、国と国、人々と人々、人と人、一人一人が神との関係において、とらえられ、その一人に至る個人が小なることでも、実行する力を与えられ実行出来る範囲において、実行することである。

「又私共は此週間に於て祈ると同時に其精神を実行にあらはし、外国より我国に在留する方々には親切を具体的に表はし、海外にある旧師、旧友には手紙を送るなど、又ロシヤの飢饉、或ひは外国伝道、朝鮮の教育など世界の為めに献金する如きも至当なる仕方と思ひます。(中略) 若しこれを読まれた方のうち之等の為献金さるる方がありましたならば郵便切手にても結構でありますから私共の本部に御送付あらんことを御願ひいたします。祈を伴なふ献金は少額でも寡婦のレプタ二つの如く富豪の心なき巨万の寄付以上に神の前には貴く見なさるるものであります。」(18:11, 1921)

その具体的な働きはどのように小さくみえても、最も小さきものにしたるは我にしたるなりの聖書の言葉通に、神において、意味がある、と見ていた。

3. ま と め

河井道子の国際性をその全体像の中から特色をとらえるとすると、この

第二期だけから判断するのは拙速である。しかし、この期に現れた特色を考察することで、第一期の国際性の開眼期において、得られたものが、河井道子自身の中で、またYWCAという社会にひらかれた活動体という地盤を得て、実際に表現された。日本におけるそういう女性の団体がまだ未知数であった時に、河井道子が志向したものは、日本にあっては類例のない新しいものであった、ということが出来よう。

それは、社会に対して女性が組織をもって、ものを言ってゆき、更にその主張を出来ることから実行にうつしたのであった。

この出来ることからが河井道子の特徴であったといえよう。小さいことも、身の周りのことも、出来ることは、実行することで、事態を少しでも、一歩でも前進させようとし、また、させることが出来ると信じた。

(1)の世界の文化と日本文化　視点の相対化であげたように、その意味では、明治から大正期に、八宏一字の日本中心思想が台頭するなかで、日本の相対化をはっきりと打ち出している。しかも、いじけるわけではなく、日本の文化を大切に評価しつつも、国際性において、今後に期待するべく、女性たちの自覚をうながしている。

(2)の平和においては、日本が富国強兵をかけたが、戦争も辞さず、戦力において、強力になることが、軍事力によって、世界と均衡がとれるという力の原理を疑わず邁進している時に、共に生きる、隣人愛の原理にたって、絶対平和を主張した。しかも、その実行において、女性たちが、家庭教育の場でも主張し得る出来ることを、啓蒙している。

(3)の難民　寄留の人々の問題は現在の、いわば、20世紀の歴史の結果がもっとも端的にあらわれた世界的な、そして、現在ではけっして、一国では解決できない国際問題である。私たちが今、女性の問題にしても、国際化された抑圧と悲惨な痛みをどう解決するか迫られている時に、河井道子の積極性に示唆を与えられる。

こうしてみると、(4)で示される国際性の単位としての人間観が河井道子においては、決して、見過ごせない。否、すべての国際性はその煎じ詰め

るところにおいて、一人の人間という人間単位が把握されなければ、それは、人間不在、非人間化、反国際性となるという視点があらわれる。それは、聖書において、一人のひとにより、罪が入り、一人の人キリストによって、罪があがなわれた聖書の思想において、そして、一羽のすずめも、神の愛のうちに、存在をゆるされている、という信仰による。

このことは、(5)最も小さいものの意味を最大に考える、聖書の思想に通じる。それを、河井道子は具体的に自分の生活の中でも、実行した。小さい献金、小さい業、小さい奉仕、すべてを同じように大切に見た。そのことは、小さいことでも、実行することに、通じた。

こうしてみると、これらの諸点の展開も、そのすべてにおいて、貫かれている河井道子の国際性の真随は、この世界の万民を救われたイエス・キリストの十字架の愛の出来事が、一人一人に与えられる神の恵みとうけとる信仰である。このキリスト教精神をもって、すべての判断の資とされた。その上で、さらに、必ず実行へとうつる。「真の祈りには必ずそれに伴ひ目に見えた実行が表はるべきもので之なき時には真の祈りではありませんまい……」(18:11, 1921)と。その実行は、国際関係という政治的範すうからみれば、いかにも些細なことに見えるかもしれないが、また時に飛躍に見えるかもしれないが、何等かの具体的実行に移されるのが、特色であった。

そして、もっとも具体的な実行は、次の第三期である恵泉女学園の創設の実行であるといえよう。これについては、別に記すことにする。

国際という言葉が、河井道子が語る場合、真実な燃えるような実践に裏づけられる。

そして、それは、どの団体や政治にもかかわらず、まさに河井道子の信仰と祈りから大胆に語られ、実行された点でまさに預言者的であった。

河井道子は生涯、キリストの愛をもって貫かれた国際という深い意味を、その意識と実践から取り去ることが出来なかった希有の日本の女性であった。

注：引用注のカッコ内の数字は巻，号，出版年号の順